

学習成果実感型英語教育プログラムとその実施について

飯塚 登世一

1. はじめに

2004年4月、島根大学松江キャンパスで新たな英語教育プログラムがスタートした。このプログラムの最大の特徴は、学習成果を TOEIC という物差しを使って測定しようというもので、新入生は入学直後の4月と10ヶ月後の2月に TOEIC-IP テストを2回受験し、学習成果をスコアの伸びという形で実感しようというシンプルな考えに基づいている。つい先日、第2回目のテスト結果が出たところで、外国語教育センター・ワークステーションにスコアレポートをとりにくる学生の反応も様々であった。200点以上アップして友達と歓声をあげる学生、「先生、あと5点どうにかありませんか」と悔しがる295点の学生など、まさに学習成果を実感する学生の姿がそこにあった。

本稿では、外国語教育センターが提供する英語教育プログラムの概要を紹介しつつ、本年度実施した英語教育の総括を行い、今後のあり方について考察する。

2. 英語教育の理念・目的

英語カリキュラムを構築するにあたっては、明確な教育理念・目的を持つことが不可欠である。そして、この理念・目的が単に机上のものでは意味がなく、教育現場と密着し、現場に立つ教員に共有されて実際の教育場で具現化されていかなければならない。また、英語教育の理念・目的は、いつの時代にも変わらぬ普遍的な側面もあるが、英語に対する社会のニーズ、あるいは学習者である学生のニーズの変化を考慮していく必要がある。大学審議会答申の中でも、特に「国際舞台で活躍できる人材の養成」が求められ、21世紀を迎え、国際化・グローバル化がさらに進む現代社会にふさわしい教育理念・目的が必要となる。

英語教育の主たる目的は、端的に言う、英語によるコミュニケーション能力を習得させることである。すなわち、英語を読む、書く、聞く、話すという4技能を学習者に習得させることである。

従来の英語教育では、これらの4技能のうち、英語の受信型能力として読解力を養成することに重点が置かれてきた。しかし、国内外における急速な国際化とグローバル化が進む中で、日本人が世界において果たすべき役割が飛躍的に増加し、その社会的貢献の基礎となる国際共通語である英語を生きた言語として身につけ、様々な情報を受容するだけでなく、自ら発信していく必要性が近年とみに増大してきている。こうした社会状況に呼応する形で、文部科学省においても平成14年7月に「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」がまとめ上げられ、その行動計画として、小学校の総合的な学習の中での英会話活動の充実

や、中学校・高等学校においては、英語学習指導要領の改訂に伴い、英語による基礎的・実践的コミュニケーション能力が重視した英語教育の推進が行われつつあり、先進的な英語教育を行う「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」の指定計画などが挙げられている（3年間、100校指定）。また、企業に対しても、企業の採用試験や昇進時において「使える英語」の所持を一層重要視するよう要請していくことも盛り込まれている。

大学の教養教育における英語教育は、上記の『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の中でも言及されているように、国際社会で活躍する人材等に求められる英語力を念頭に置き、将来、仕事や研究において英語が使えることを目指す教育内容を編成し、明確な目標を持って実施していかなければならない。同時に、そのプログラム作りにおいては、「大学ユニバーサル化」を迎え、対象となる多様な学生の実態を踏まえた上で、学習意欲・動機付けを高揚させるような教育内容を立案する必要がある。

このように、21世紀における英語教育は、まず、実践的なコミュニケーションの手段として英語技能を習得させることを目標とし、学習者の動機付けを高める教授法の工夫や教材研究を重ねていく必要がある。ただし、大学教育において教える側の者は、英語の習得過程において、観察能力、分類・分析能力、演繹能力など、さまざまな知的訓練を行うことができ、多様な国民の歴史、風俗、伝統、価値観など幅広く異文化を理解し、国際感覚を養っていくことができるという視点も見失ってはいけない。さらに、英語学習を通じて、自らを英語という鏡に映しだし、日本語、日本人の思考法、日本文化の理解も深めることができ、英語教育の長期的な成果として、英語学習者がさまざまな分野で国際社会に貢献できる人格形成ならびに知性の伸展の一助となるという見識をもって、実践的な英語教育に従事していくことが求められる。

英語教育の目的は、英語4技能の習得という普遍的なものであるが、社会が進展していくように、その習得にあたっての教育内容、方法論は常に改善していかなければならない。そのためには、組織的な取り組みがことに求められ、自己点検・評価を毎年行い、教育成果を日常的に検証していく体制作りが必要である。

4. 英語教育の基本方針

平成14年度に島根大学自己評価等委員会、教育専門委員会・外国語教育評価作業グループの『教養教育における外国語教育の自己評価一現状と提言一』によって、外国語教育の様々な課題が浮き彫りにされ、新カリキュラム策定に当たってその諸課題についての検討が行われた。以下、新カリキュラムの策定プロセスを追いながら、新英語教育プログラムの基本方針を述べていく。

カリキュラムを策定していく上で、まず、考えなければならない大きな課題は、いかにして明示的な到達目標を設定できるかということであった。島根大学においては、カリキュラム改訂に伴って導入するTOEIC(-IP)のスコアを利用し、数値的に到達度目標を設定すること

とした。具体的には、学年進行従って受講する最後の必修科目の履修資格という形で、学生全員に TOEIC(-IP)のスコア 300 点を求め、各々の学生のスコアを入学時と比較して平均 50 点伸ばすことを当面の目標として定めた。¹

教育内容については、自学自習を基本として、「役に立つ英語」の基礎力の養成に重点を置くカリキュラム作りを目指した。今後、教養教育において身につけるべきエッセンシャル・ミニマムを策定していくことも課題として上がっている。また、理系学部の JABEE 資格習得にも対応できるように実践的英語能力の養成を前面に打ち出し、各学部における専門教育との連携についても今後模索していくこととした。さらに、学生の学習意欲を高揚させるカリキュラム作りというのも重要な観点で、学生の興味関心にそった選択ができる従来のメニュー方式を継続し、そのメニューについては、学生ニーズ、社会的ニーズを勘案して、2～3年ごとに見直しを行っていく方針を打ち出した。

学習環境についても改善し、クラス規模の適正化を図り、習熟度別クラス編成を導入し、成果の上がる学習環境を作る努力をした。可能な範囲で少人数教育を推進し、読解中心のクラスでは 40 名を基本とするが、リスニング中心のクラスでは 30 名、会話クラスでは 20 名とした。また、時間割編成上の難しい面はあるが、学部・学科ごとのクラス編成ではなく、文系学部、理系学部で大きな学生母集団を作る工夫をし、できる限り効果の上がるクラス編成を行った。

必修単位が 4 単位（1 単位、30 時間）と限られているが、履修年次についても工夫し、継続的に英語学習できるように必修科目を複数年で修得するカリキュラムとし、その後卒業時まで学習機会を保証し、卒業時に英語能力が維持できる体制を作ることを目指した。

そして、最後に特記すべきことは、英語力の不足する学生支援を積極的に行う方針を盛り込んだことである。4 月に実施する TOEIC-IP の成績を参考に、入学時に語学力が不足する学生を対象として、補習授業を実施し、専任教員全員がこれに従事し、後期には、学生と教員の交流の場として設けた「外国語教育センター・ワークステーション」を活用することによって、個別的な授業外の助言を積極的に行うことにした。

3. 英語カリキュラムの概要

それでは、外国語教育センターが実施する英語カリキュラムの概要を述べることにする。以下の表はその全体像を示している。

履修年次	授業科目名	内 容	単位	必修・選択	成績評価
1年前期	英語 I A	総合入門英語	1	必修	統一試験及び共通小テスト
1年後期	英語 I B	読解基礎英語 (Reading 対応)	1	必修	TOEIC Readingスコア 及びレベル別共通小テスト

1年後期	英語Ⅱ A	運用基礎英語 (Listening 対応)	1	必修	TOEIC Listeningスコア 及びレベル別共通小テスト
2年前期	英語Ⅱ B	目的・技能別メニュー (読解, 総合, CALL, 会話)	1	選択必修	メニュー別小テスト及び 個別試験 *TOEIC(-IP)300点未満の学生 は受講できない。
2年後期～ 4年後期	英語Ⅲ A 英語Ⅲ B 英語Ⅳ	中級英語・上級英語 (会話, 目標・テーマ別 メニュー等)	1 1 1	選択 選択 選択	メニュー別個別試験

1年時には、「英語Ⅰ A」(総合入門英語)、「英語Ⅰ B」(読解基礎英語)、「英語Ⅱ A」(運用基礎英語)の3科目を必修としている。これらの科目はすべて1単位である。そして2年前期に「英語Ⅱ B」(目的・技能別メニュー／読解・総合・CALL [Computer-Assisted Language Learning]・会話)という1単位の選択必修科目を設けている。2年後期からは自由科目として中級英語や上級英語を設け、最高4単位まで履修できるようになっている。

このカリキュラムへと変更する前、つまり2003年度までは、1年のうちに必修4単位をすべて履修するプログラムとなっていたが、それを変更し、2年前期まで英語の必修科目を設け、学習期間が複数年に及ぶようにした。²「鉄は熱いうちに打て」という言葉もあるが、本学では1年前期には英語の必修科目として1単位しか与えていない。1年前期というのは、まだ高校生の気分が抜けきれていない学生が相当数存在し、ある種の意識改革の期間が必要なのである。この点については、異論もあると思われるが、4単位しかない英語の必修単位を1年前期に2単位も使ってしまった方がいいものかと考え、1年前期には「英語Ⅰ A」という授業を週1コマ開講することとした。ここでは、「教室の中の英語」から「役に立つ英語」への転換教育ということで、英語学習に対する学生の意識を変え、自学自習のために必要な学習方法を身に付ける時間に充てている。授業内容は、全クラス共通で、約1,000名の学生がすべて同じ内容の授業を受けることになる。

1年後期には、「英語Ⅰ B」というリーディング対応の科目と、「英語Ⅱ A」というリスニング対応の科目を設け、それぞれの技能を中心に学習する。リーディングのクラスでは、ケンブリッジから出ている教材を使って速読に対応できる授業内容となっている。リスニングのクラスでは、マクミランから出ているリスニング教材を使用して、会話表現学習を行いながら、スピーキングを含めた英語の運用基礎能力を向上させる内容となっている。³

この「英語Ⅰ B」、「英語Ⅱ A」では、TOEICスコアを成績評価に用いているのが特徴である。「英語Ⅰ B」ではTOEICのリーディングのスコアを、「英語Ⅱ A」ではTOEICのリスニングのスコアを、それぞれ点数化して4割程度を成績評価に反映させている。

また、これらの授業では、到達度別クラス編成を行っている。1年前期の必修科目である「英語 I A」の授業中に行う TOEIC 形式のまとめテストと、期末試験として実施する TOEIC 形式の Mini-Test のリーディングとリスニングに関する成績結果に基づいて学生をそれぞれ成績順に 1 番から並べ、リーディングのクラスでは上位から順に 40 人ずつ、リスニングのクラスでは 30 人ずつ区切ってクラス編成をしている。さらに、クラスを上級、中級、初級の三つのレベル分け、レベルごとに共通の教材を用いて授業を展開している。したがって、学生によってはリスニングとリーディングとで受講するクラスのレベルが異なることもある。

このクラス編成ではさらに工夫をしている。それは学部を統合して行っていることである。具体的には、法文学部と教育学部、総合理工学部と生物資源科学部をそれぞれ合体させてクラス編成をしている。例えば、総合理工学部と生物資源科学部の学生をあわせると約 600 人となるが、「英語 II A」というリスニングのクラス分けをする際には、この約 600 名を「英語 I A」のリスニングに関する成績に基づき 1 番から 600 番まで並べて、上位から 30 人ずつ区切って 20 クラスを設けているのである。

2 年前期に開講する「英語 II B」では、目的・技能別に設けているメニューの中から一つを選択する形になっている。複数クラス開講するメニューでは、1 年後期の 2 月に実施する第 2 回 TOEIC-IP テストのスコアを基にクラス分けを行う。

この 2 年前期の選択必須科目「英語 II B」は、TOEIC(-IP)300 点以上でなければ履修できないようになっている。先にも述べたように、これは学生に英語の基礎力を確実に身につけさせるために実施しているものである。

さらに、外部テストを活用し、単位認定制度を積極的に運用しているのも大きな特徴の一つである。以下の表を見てみよう。⁴

試験種別	成績等	認定授業科目	最大認定単位数	評価
TOEIC(-IP)	500点	英語 I A 英語 I B 又は英語 II A	2 単位	認定
	600点	英語 I A, 英語 I B, 英語 II A, 英語 II B	4 単位	認定
	650点	英語 I A, 英語 I B, 英語 II A, 英語 II B 英語 III A, 英語 III B	6 単位	認定
	700点以上	英語 I A, 英語 I B, 英語 II A, 英語 II B 英語 III A, 英語 III B, 英語 IV	8 単位	認定
TOEFL	470点 (150)	英語 I A 英語 I B 又は英語 II A	2 単位	認定
	505点 (178)	英語 I A, 英語 I B, 英語 II A, 英語 II B	4 単位	認定

(TOEFL)	523点 (193)	英語ⅠA, 英語ⅠB, 英語ⅡA, 英語ⅡB 英語ⅢA, 英語ⅢB	6単位	認定
	540点以上 (207)	英語ⅠA, 英語ⅠB, 英語ⅡA, 英語ⅡB 英語ⅢA, 英語ⅢB, 英語Ⅳ	8単位	認定
実用英語技能	準1級	英語ⅠA, 英語ⅠB, 英語ⅡA, 英語ⅡB	4単位	認定
検定試験	1級	英語ⅠA, 英語ⅠB, 英語ⅡA, 英語ⅡB 英語ⅢA, 英語ⅢB, 英語Ⅳ	8単位	認定

単位年認定の際の基準点であるが、実際に学生にとって達成可能な目標となるように設定した。単位認定は TOEIC(-IP), TOEFL, 及び実用英語技能検定試験を対象とし、TOEIC(-IP)の場合には500点で必修2単位、600点で必修4単位を認定している。650点、700点では自由科目の単位まで認定できるようになっている。

学生にも様々なタイプの学生が存在する。例えば、課外活動などのかね合いでどうしても出席回数を確保するのが難しいという学生もいる。また、多人数の中で授業を受けること自体が困難な学生もいる。そのような状況を考えると、自ら頑張って勉強し、TOEIC(-IP)で600点を取って必修4単位分の認定を受ける、そういう単位取得の道を設けることは教育的見地からも重要であろう。

また、将来的な観点からも、単位認定制度の積極的運用は必要であると考えられる。本学が実施する英語教育プログラムでは、前期、後期にそれぞれ約80クラス、年間計約160クラスが開講・運営されている。この実施には人件費などの問題もあり、今後も維持できるかどうかが大きな課題となっている。単位認定制度を積極的に運用することで、将来的には開講クラス数の抑制、クラスの少人数化などが実現できるのではないかと考えている。

4. TOEIC-IP テストの実施とその結果について

ここからは、本年度、外国語教育センターが実施した TOEIC-IP テストとその結果について説明していく。

本学では TOEIC-IP テスト実行委員会を設置し、そこで年間の実施計画作成から会場準備、試験実施、監督業務などすべてを行っている。当初、生協に協力を願おうとの意見もあったが、学内で同意が得られず、センターの中に実行委員会を設置し、センターに所属する全ての教員、事務職員が実施運営に当たることとなった。また、これだけでは試験実施時に人員が不足するため、学生アルバイトのほか、嘱託講師、特別嘱託講師からも試験監督業務への協力をえている。

TOEIC-IP テストは2004年度より導入し、松江キャンパスの四つの学部の1年生を対象にこれまで2回実施した。第1回目は4月17日(土)に行い、約千名の学生を半分に分け、午前と午

後に分けて受験させた。受験者数は1,025名であった。試験の途中、体調を崩して退席する学生が出たが、実施にあたって事前に保健管理センターに人員を配置してもらっていたため、無事対応することができた。また、当日受験できなかった学生のために、追試験を翌週の水曜日に実施した。追試験の受験者は19名だった。したがって、4月の試験は本試験、追試験合わせて1,044名が受験した。

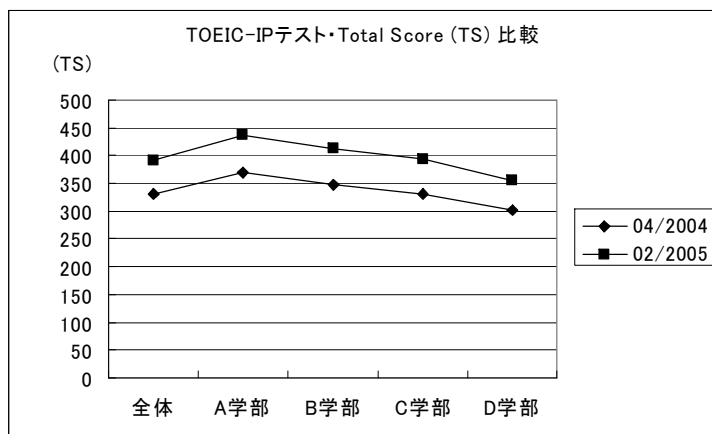
第2回目は2005年2月2日(水)の午前中に行った。1回目のように学生を分けることなく、一斉受験という形をとった。使用した教室数は10教室で、1クラス当たり平均約100名となった。受験者数の多い教室は、試験監督者を4名配置して対応した。2回目の受験者数は本試験が1,003名、追試験が11名、合わせて1,014名であった。第1回目から30名ほど減っているが、その中には退学者や休学者が含まれている。

2回目は一斉受験としたが、これはTOEIC-IPテストを「英語I B」と「英語II A」の期末試験に当てているためである。期末試験期間中に実施するため、教務とも連携し、何とか試験時間と試験会場となる教室を確保することができた。

では、ここから、本年度実施したTOEIC-IPテストの結果について説明していく。

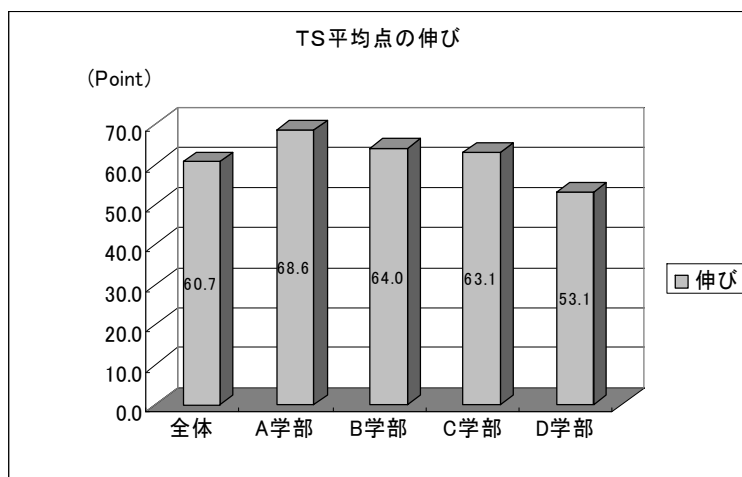
まず、2004年4月と2005年2月に実施した2回のTOEIC-IPテストの結果の比較を見てみよう。以下の図表はトータルスコア(TS)の平均点を全体、学部ごとに比較したものである。

【図表1】



松江キャンパスの4学部全体で2004年4月実施のTOEIC-IPテストの平均点が331.2点、2005年2月実施が391.9点で、平均60.7点伸びたことがわかる。

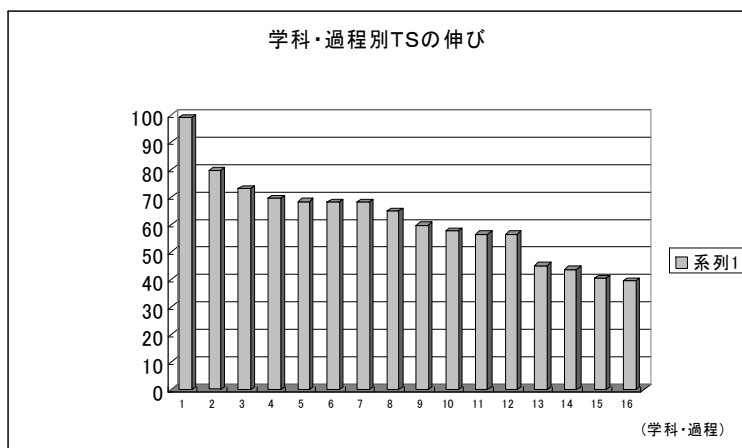
【図表 2】



学部別の数値を見ると、最も伸びたA学部では68.6点の伸びを示している。反対に最も伸びが小さかったD学部では53.1点となっている。

さらに4学部の16の学科・課程別に調べてみると、大きな差が見られた。

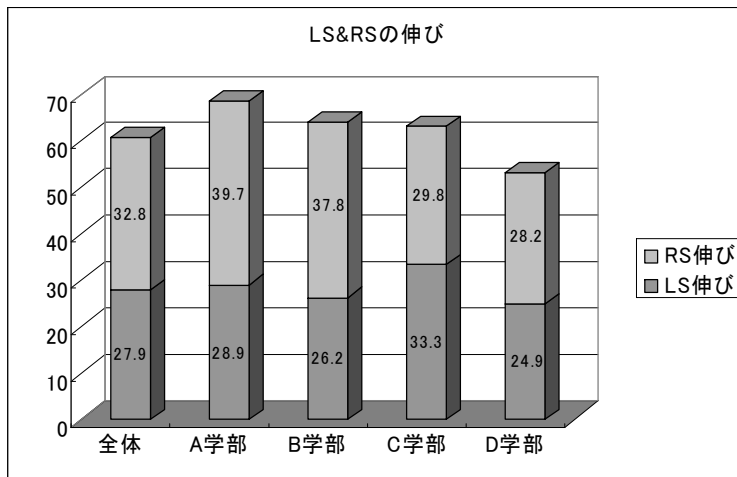
【図表 3】



平均100点近くスコアを伸ばした学科がある一方で、40点を切る学科もあった。

次に、リスニングセッション(LS)とリーディングセッション(RS)の平均点の伸びを見てみよう。

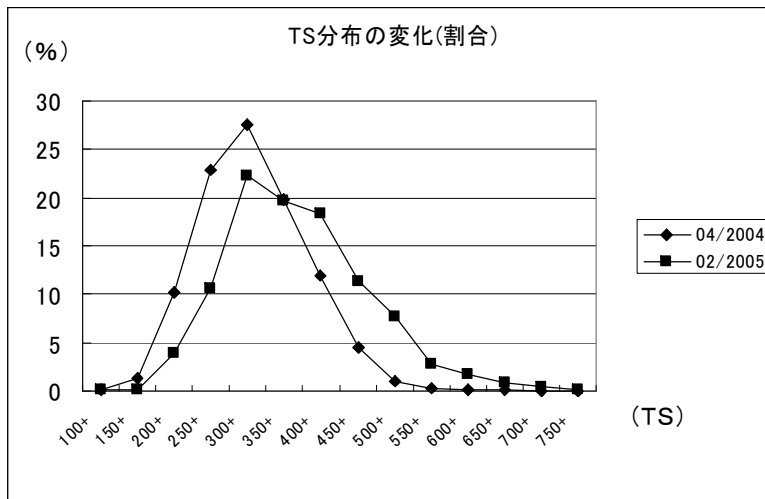
【図表4】



4 学部全体の平均で、リスニング 27.9 点、リーディング 32.8 点の伸びがみられる。リーディングの方が、リスニングに比べて、若干伸び幅が大きくなっているが、それぞれ約 30 点ずつバランスよく伸びたことがわかる。学部別にみると、C 学部においてのみ、リスニングの伸びがリーディングの伸びを上回ったという結果が出ている。

では、トータルスコアの分布という観点から 2 回の TOEIC-IP の結果を分析してみよう。

【図表5】



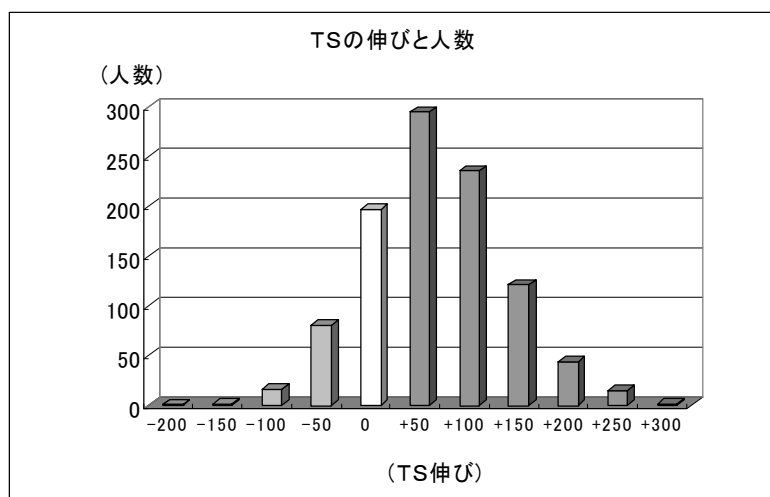
上のグラフは 50 点刻みで得点者の分布を表したものである。これを見ると、分布が大きく右に移動していることがわかる。

300点未満の得点者数に関して見てみると、1回目では361名であったものが、2回目では151名に減少している。更に詳しく分析した結果、2回目で300点に達しなかった151名の学生のうち、約40名は1回目で300点を上回っていたことがわかった。これは、必修科目「英語ⅡB」の履修資格であるTOEIC(-IP)スコア300点以上という数字が、一部の学生において、ある種の「達成目標」となってしまったためではないかと考えられる。300点というハードルを設けたことが、思わぬ事態を引き起こしたわけである。こうした学生に対する対処をどのように行っていくかが今後の大きな検討課題の一つであると思われる。

500点以上の得点者数を見てみると、1回目では17名にすぎなかったものが2回目では139名へと、8倍強の増加を示している。中でも、600点以上の高得点者を見てみると、1回目がわずか3名であったものが、2回目では33名となり、11倍の増加を示している。

最後に、学習成果実感型英語教育プログラムの2004年度の成果について見てみよう。まず、個々の学生におけるトータルスコアの伸びという観点からみることにする。

【図表6】

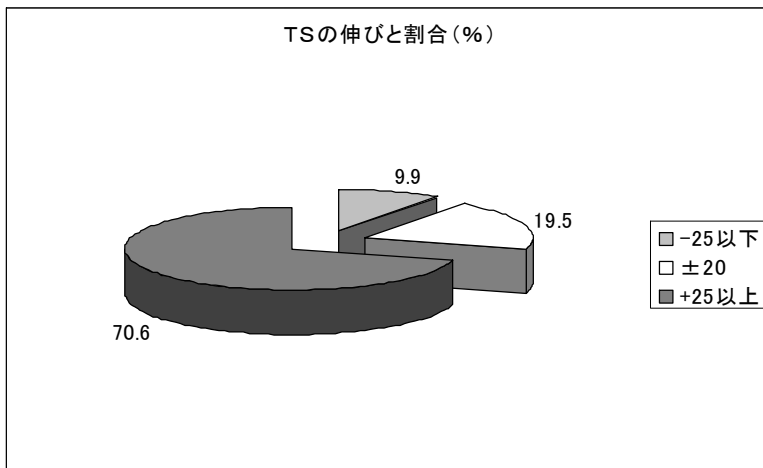


上の棒グラフにおいて、横軸の「0」の部分には、TOEICスコアの伸びが-20点から+20点の範囲内に入る学生数を示している。その右隣の「+50」は、25点から70点まで伸びた学生を、反対に「0」の左隣の「-50」はスコアが25点から70点下がった学生を示している。したがって、このグラフは学生のスコアの伸びを約50点刻みで表していることになる。

「0」の部分、すなわち、スコアの伸びが±20の範囲内の学生は、入学時とほぼ同じ英語力をそのまま維持したと捉えられる。また、25点以上伸びた学生は、明らかに伸びが認められる学生であり、25点以上スコアが下がった学生は、このプログラムに適応しなかった学生であると考えられる。

スコアの伸びとその割合を示したものが以下の円グラフである。

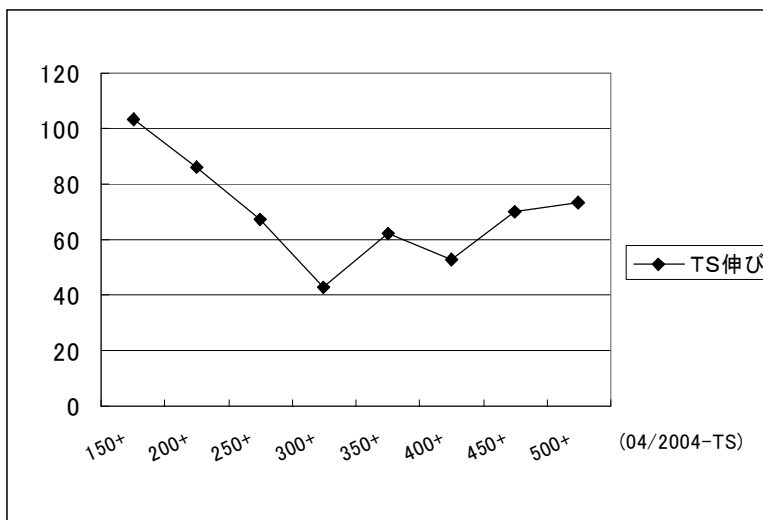
【図表 7】



これを見ると、約10%の学生はこのプログラムに適応できなかったということになり、約20%の学生は入学時の力をほぼ維持し、約70%学生はプログラムに適応して成果を上げたと考えられる。今後は、点数を伸ばす支援をする一方で、いかにしてプログラムに適合できない学生を減らすか、すなわち、いかにして現在のプログラムの学生へのアピール度を高めていくかが大きな課題であると思われる。

では最後に、1回目のトータルスコア(TS)と得点の伸びとの関係を見てみよう。

【図表 8】



上のグラフは、1 回目の TS が例えば 325 点であった学生が、2 回目で何点伸びたかを図式化したものである。これを見ると、1 回目の TS が 300-345 の範囲に入る学生の伸びが最も低く、300 点未満では TS が低ければ低いほど得点の伸びが大きく、350 以上では TS が高ければ高いほど得点の伸びが大きくなることを示している。300 点を超えた時点で 2 年前期の必修科目「英語 II B」の履修資格を得ることになるので、300 点をわずかに超えた学生の中に、その時点で既に達成感を持ってしまう学生が相当数いるものと考えられる。基礎的な英語力を保証するために TOEIC(-IP) 300 点を設けたことの弊害がここにもみられる。

5. まとめ

2004 年度は新しい英語プログラムを導入する最初の年ということで、データを収集するという大きな目的があった。また、TOEIC(-IP) 50 点アップという到達度目標を達成しなければいけないプレッシャーもあった。新しいプログラムの実施にあたっては学内にも様々な意見があったが、到達度目標を達成したことで、2005 年度もこのプログラムを継続することで合意している。今後、今年度得られたデータを詳細に分析し、それに基づいて改善と工夫をさらに加えることで、より良いプログラムにしていきたい。

参考文献

筏津成一(2004)「鳥取大学における英語カリキュラムの改革について」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』第 1 号, pp. 103-110.

宮崎充保(2004)「覚え書き: TOEIC はツールである」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』第 1 号, pp. 111-120.

[その他参考資料]

『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」文部科学省. 2002 年 7 月

『外国語教育センター』(仮称)における新しい外国語教育への提言」『外国語教育センター』準備委員会 WG (外国語教員有志). 2003 年 4 月.

『島根大学外国語教育センター設置計画書』島根大学外国語教育センター設置準備委員会. 2004 年 2 月.

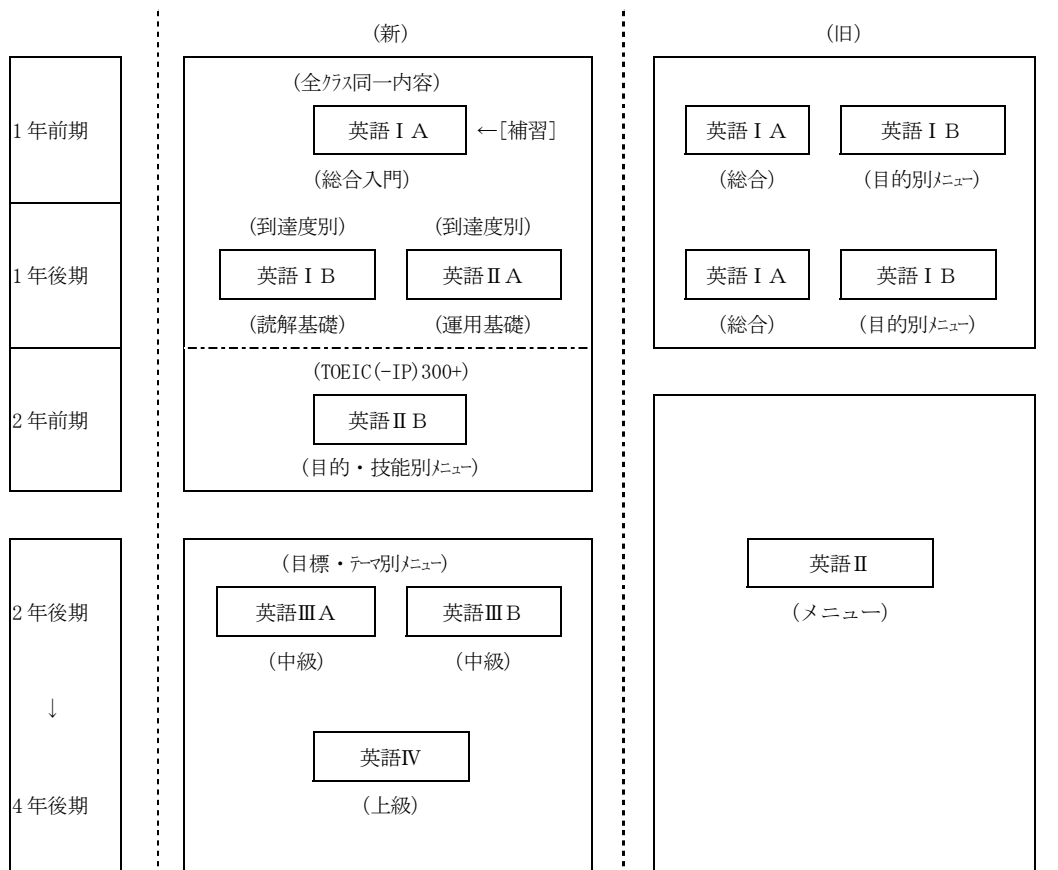
『大学教育機構だより』第 3 号. 山口大学大学教育機構. 2004 年 10 月.

注

- 1 TOEIC(-IP) 300 点の設定に関しては、筏津 (2004:110) も参照のこと。また、TOEIC(-IP) の平均点 50 点を引き上げるという目標についても、固定的なものではなく、学生の実態調査に基づいて、柔軟に妥

当な目標設定を行っていく。

- 2 参考のため、新カリキュラムとそれ以前の旧カリキュラムの違いを図式化したものを以下に示しておく。



- 3 平成 16 年度の「英語 I A」の統一テキストとして以下を採用した。

Lin Lougheed, *LONGMAN Preparation Series for the TOEIC Test (Intermediate Course)*

- 4 平成 16 年度の「英語 I B」, 「英語 II A」で採用したテキストは以下の通り。

(1) 「英語 I B」

[初級] Edward Spargo, *Timed Readings: Book One*. 3rd ed., Glencoe/McGraw-Hill

[中級] Edward Spargo, *Timed Readings: Book Three*. 3rd ed., Glencoe/McGraw-Hill

[上級] Edward Spargo, *Timed Readings: Book Five*. 3rd ed., Glencoe/McGraw-Hill

(2) 「英語 II A」

[初級] Lin Lougheed, *Learn to Listen: Book 3*, Macmillan

[中級] Dale Fuller, *Airwaves BASIC*, Macmillan

[上級] Dale Fuller, *New Airwaves*, Macmillan

5 詳細に関しては以下を参照のこと。

(1) 最大認定単位数については、認定可能単位数は「最大認定単位数」から「既習単位数」を差し引いた単位数とする。

(例) 「英語 I A」(1 単位) 既修者が実用英語技能検定準 1 級を取得し、単位認定を申請した場合には、4 単位－1 単位＝3 単位の認定となる。

(2) TOEIC は、公開テスト及び団体特別受験制度 (IP テスト) とする。

(3) TOEFL 成績の () 内は、平成 13 年から実施された新評点法による。